日本記者クラブ
記者会見

原発即時ゼロ　総理が決断すればできる

小泉純一郎　元首相

２０１３年１１月１２日

小泉純一郎元首相が記者会見し、「原発ゼロ」の主張を詳しく語り、質問に答えた。会見の出席者は４１０人で、日本記者クラブで最大規模の会見となった。新聞・放送が詳しく報じ、外国メディアや週刊誌、月刊誌も取り上げ、小泉発言への関心が高いことを示した。

小泉元首相は「安倍総理が国民から与えられた権力を、いかに望ましいあるべき姿に向かって使うか。こんな運のいい総理はいない。総理が決断すれば、原発ゼロ反対論者も黙っちゃいますよ」「壮大な夢のある事業じゃないですか。総理の判断力、洞察力の問題だ。ぜひとも舵を切ってもらいたい」「即ゼロのほうがいい。原発に代わる代替エネルギーに対して、原発にあてた費用を回した方がいい」などと話した。靖国参拝、日米関係、沖縄の米軍基地についても語った。

司会　日本記者クラブ企画委員　倉重篤郎（毎日新聞専門編集委員）

一般社団法人アジア調査会（東京都千代田区一ツ橋）が発行する「アジア時報」（2013 年 12 月号）に掲載された記者会見の全記録を、アジア調査会のご了解を得て、日本記者クラブのホームページに掲載します。

日本記者クラブ　Youtube チャンネル
http://www.youtube.com/watch?v=YxVwp_Bk-eM&list=UU_iMvY293APrYBxOCJReIVw

©公益社団法人　日本記者クラブ

司会：倉重篤郎・企画委員（毎日新聞専門編集委員）　今日の話にいたったいきさつを簡単に述べさせてもらいます。小泉さんによると２０１１年の３・11から一貫して同じ発言をされているということなのですが、小泉さんの発言が我々の耳に届き始めたのは、あちこちの講演などで小泉さんが原発ゼロ発言をされているという話が広まってからです。そうであるならば、小泉さんに日本記者クラブにおいでいただいて、お話しいただきたいとお願いしたところ、「それはそれでいい、しかし、僕は講演をするので質問は受けないよ」というお話でした。私はちょっと考えましたけれども、それでも小泉さんをここにお呼びする価値があるのではないかということでお願いしました。しかし、我々の世界はそれだけでは済まないと思うので、代表質問を含めて１、２問の質問はよろしいという話はいただきました。ということで、今日は１時間半、小泉さんが原発だけでなく、種々の政治課題について小泉さんのお話をいただき、残りの時間で代表質問プラスアルファという形で臨みたいと思います。今日は３５０人という今年最高の参加者です。では、小泉さん、よろしくお願いします。

小泉純一郎・元首相　ただいまご紹介いただきました小泉純一郎でございます。本日はお招きいただきまして、まことに有難うございます。ただいま倉重さんが話された通りなのですが、私は総理を退任してからテレビ出演も一切してないし、インタビューも全てお断りしてきたのです。つい最近、倉重さんが書かれた『小泉政権１９８０日』（行研）という私の総理時代の記録を丹念に調べて、回顧録ではないのですが、この本を贈って頂いて、私拝見して「ああ、よくこれだけ丁寧に調べてくれたなあ」と。「有り難いことだなぁ、これだったら回顧録を書く必要はないな」と思っておりましたところ、倉重さんから「読んでくれましたか。実は日本記者クラブで話してくれませんかと仲間から言われている」というお話が倉重さんからあったのです。特に毎日新聞の山田孝男記者が８月でしたかね、私の話をコラムで取り上げてくれました。短い文章なんですが、これが実にうまく要点を取り上げていましたね。あれからですよ、一斉にマスメディアが私に注目し出したのは。ずっと、３・11の事故が起こってから、似たような話をしていたんですよ。私は今まで私の話に対して一切、記者を入れてくれとか入れるなとか、一言も言ったことがありません。主催者に全て任せているんです。そこに記者が来て何を書こうが勝手だったんですよ。しかし、毎日の山田記者が書く前はみんな無視していたんですね。あの毎日の山田記者のコラムが出てから、もういろんな方からインタビュー申し込みがあって、お断りするのも大変だなと思っていたところに倉重さんから「ここで話せば、もう取材受けなくていいじゃないですか」という話で、「それもそうかな」と思って今日は喜んでやって参りました。「ただし記者会見はしないよ」ということで。「しかし、私の話を聞いて質問したい方もおられるだろうから、若干時間を残して１、２問受けますよ」という話で今日はやって参りました。８０分くらいいただけるということで、原発だけでなく時間あれば靖国問題とか、日中関係、日米関係もちょっと触れたいと思っています。

読売新聞社説の小泉批判に反論

最初に原発問題ですが、先月（10月）ですか、読売新聞が出した「小泉原発ゼロ発言を批判する」という記事がありましたね。社説で私のゼロ発言を批判しておりましたから、この社説から、あの批判に対して私がどういう意見を持っているかということから始めたいと思います。１０月８日の読売の社説、二、三、主な批判があるんですけれども、一つには小泉の原発ゼロ発言は、ゼロにした後、どういう代案があるのか、代案を出さないでゼロ発言をするのは無責任である、あまりにも楽観的過ぎるだろうという批判です。しかし、この原発問題は広くて大きくて深い問題ですよ。国会議員だけで代案出そうたってなかなか出る問題じゃありません。まして私一人がゼロという代案を出せなんて言ったって、それは不可能です。だから、政治で一番大事なことは方針を示すことです。原発ゼロという方針を政治が出せば、必ず知恵ある人がいい案を作ってくれるというのが私の考えなんですよ。原発ゼロに賛同する専門家、経産省、文科省の官僚も含めて識者も集めてゼロになった場合に、何年かけてゼロにするのか、その間に再生可能エネルギーをどのように促進し、奨励していくのか、あるいは原発を廃炉にする場合だって３０年、４０年かかるんでしょ。廃炉をするためにも専門家が必要だ。そういう技術者をどう確保していくのか、さらに原発ゼロになった後、地域の発展をどう考えるのか。原発ゼロの後、再生エネルギー、さまざまな雇用問題、原発に従事していた方の雇用問題をどうするか。そういう広範囲な問題が残っているわけですよ。こういう問題を国会議員、一政党、一議員だけで答えを出せる訳ないじゃないですか。だから専門

家の知恵を借りて、その結論を尊重して進めていくべきだというのが私の考えなのです。

もう一つの批判は、原発ゼロにすれば、火力発電とか、さまざまな電源調達のために輸入量が多くなって電気料金が上がると。ＣＯ２の排出量も多くなるという批判ですね。しかし、日本の技術は時代の変化を読むのに非常に敏感ですよ。つい最近も新日石の社長をしていた、ＪＸホールディングスと名前を変えましたが、渡文明さん、今、経団連の副会長をやっているんですか、渡さんにお会いして話したら「もう数年以内に燃料電池車が実用化される」と。「うちはエネオスのスタンド、これをガソリンスタンドだけじゃなくて水素供給スタンドを用意している」と。「電気自動車よりも早く燃料電池車が実用化されるのではないか」と自信を持って話されていましたね。そうすれば燃料電池車は水素と酸素。水ですからＣＯ２出さないんですよ。またトヨタにしてもホンダにしても日産にしても外国の自動車会社もハイブリッド、電気自動車を必死に開発している。夜中に寝ているうちに充電できる。ガソリンでもいい、電気でもいい。さまざまな、できるだけＣＯ２を出さない自動車の開発が進んでいますよ、企業で。ＬＥＤだってそうでしょう。省エネ技術。ここはＬＥＤ使ってないと思うんですけれどもね、設置費が多少高くても省エネの観点からＬＥＤがいいというね。ＬＥＤを使う過程が今、白熱電灯を使う家庭よりトップになったでしょう。

清水建設新本社ビルの省エネ

日本の国民というのは実に環境に協力的ですよ。企業も国民も。私、先月、清水建設を見学したんです。去年新しい本社に建て替えました。地下３階、地上２２階ですか、１００㍍くらいのビルですよ。この新本社建設から１年ちょっとたったんですけれど、新本社になってから旧本社にくらべてＣＯ２の排出量を実に７割削減したというんですから。７０％削減したと。それはなぜか。太陽光パネルを使っている。そして本社内すべてＬＥＤを採用している。太陽が上がっていて昼間明るいと、ＬＥＤ使わなくても太陽光パネルだけで仕事ができるほど明るい。そして曇って、暗くなってくるとそれに合わせてＬＥＤの電球が灯いてくる。自動調節ですよ。旧本社に比べてＣＯ２の排出量を５割削減しようとしたところが、７割削減できちゃったというんですから。年間の排出量。なおかつエアコン、今ここで冷房でも暖房でも音がするでしょ、エアコンの風。それをエアコンを輻射熱によって、どういう技術か私よく分からないのですが、説明があったけど、とにかく音のしないエアコンを全社のビルにつけちゃった。音がしないんです。夏は涼しくしようとして、会社でも温度を下げようと強くする。そうするとエアコンの風に当たった人は可哀想ですよ。足が寒くてしょうがない。夏でも冷房を下げすぎると、膝掛けしないと寒くてしょうがない、女性は特に可哀想ですよね。冬、暑くしすぎると今度は上だけ暑くなっちゃう。熱は上に行きますから、足が寒い。そのためにはもっと温度を上げなければいけない。そういうのをなくしちゃって、輻射熱で自動的に快適な温度にする。そういう装置を全社内に作っちゃったんですから。音がしなくなっちゃった、エアコンの。このビルは日本で初めてだと言ってましたね。この音のないエアコンをやってから気付いたことがあるというんです。「何だ」と言ったら、今まではエアコンの風の音で外の騒音が入ってこなかったと。ところが新本社になってエアコンで音がしないものですから、外の騒音が入るようになっちゃった、というぐらい静かになっちゃったんです。そういうビルを建てる技術を持っているんですね。これは一例ですが、いずれ新しいコンサートホールなんていうのは音のしないエアコンを導入するでしょうね。

この一つの例をとっても、日本の技術力はたいしたもんですよ。先日、日経新聞に出ていましたね。三菱重工が石炭火力発電所の建設をする際に、大気汚染を防止する技術を開発したという記事が出ていましたね。だから、今後、原発をゼロにする。そして、さまざまな再生エネルギー、水力、あるいは太陽光でも風力でも地熱でも、原発建設に向けた費用をそっちに振り向けていけば、さまざまな代替エネルギーの開発が進んでいくと思いますよ。その技術を日本は、日本企業は持っていると思いますね。またそういう企業に日本国民は協力しますよ、積極的に。多少高くても。

ドイツの代替エネルギーは小規模施設

ドイツにも８月に行ってきました。ドイツは原発ゼロ政策を進めていますけれども、太陽光、風力、バイオマスとかやっていますが。現地に行ってきたんですが、かなり大規模にやってるのだろうと思ったら、そんな大規模じゃないんですね。太陽光とか風力、あるいはバイオマスの施設に行って、その担当者と話してきましたが、大体、最初そういう会社立ち上げるときは数名だったそうですよ。お金がない、投資してくれる人がいない。ところがだんだんだんだん、できるんだな、政府が原発ゼロ政策を進めて採算がとれるよう

になって、だんだん人数を増やして大規模になってきたけれども、大体が地産地消です。地域の電力をまかなうために作ればいいんだと。だから風力にしても太陽光にしても、そんなに大規模じゃなくても地域の電力をまかなうことができるんだと。バイオマスも牛のふん、馬のふんまで電気に変えちゃっているんですから。トウモロコシもおいしいのは食料用、おいしくないのは電力用に分けて使っている。そうすると残りカス、残滓が出ますね。その残滓は地元の農家にあげる。農業の肥料に与えちゃう。まさに地産地消体制ですよ。日本だってこれは出来ますね。廃材でもバイオエタノールできるでしょ。

現にブラジルは数年前に行ってきましたけれど、サトウキビからバイオエタノールを作って、街の中ではガソリンスタンドと一緒にバイオエタノール供給スタンドが一緒に併設されていて、一台の車がガソリンを全部使ってもいい、バイオエタノールを全部使ってもいい、混合してもいい。同じスタンドで供給できているんですから。まあ、ブラジルみたいにサトウキビが大量に安くはできませんから、日本はそのようなバイオエタノールの大量生産はできませんから、それは無理だとは思いますけれども、さまざまな知恵が出てくるのではないかと思います。

現に、太陽光は日が陰れば駄目だよ、風力は風がやめば駄目だよと言っていましたけれどもね。今、でも太陽光にしても風力にしても蓄電技術が開発されているじゃないですか。陸上だけじゃない。洋上にもできる。地熱だって、九州ではそんなに深く掘らなくても、蒸気で電気が起こせるので使っているじゃないですか。さまざまな規制がありますけれども、そういう点においても環境に配慮した規制緩和をすれば地熱だって広がっていきますよ。私は、そういう代替エネルギーは国会議員だけではなくて、専門家あるいは発明家の知恵を借りて出していけば、今では想像できないような代替エネルギーが確保できるのではないかと思います。

「核のゴミ最終処分場、可能」は楽観論

もう一つ。これが一番の原発ゼロ批判の中心だと思うんですけれども、どう言っているかというと、原発必要論者、推進論者はゴミの処分法は、いわゆる核の廃棄物ですね、ゴミと言いましょう、普通は。核廃棄物の処分法は技術的に決着しているんだと。問題は処分場が見つからないことなんだと。ここまでは私と一緒なんですよ。ここからが必要論者と私の持論の違うところなんです。ここから必要論者がどう言っているか。処分場のめどがつかないという、それはめどをつけるのが政治の責任ではないかと、つけないのがいけないんだ、と。これが必要論の中心だと思うんですね。私は結論から言うと、これから日本において核のゴミの最終処分場のめどをつけられると思う方が楽観的で無責任過ぎると思いますよ。すでに１０年以上前から最終処分場の問題は技術的には決着してるんですよ。それがなぜ10年以上かかって一つも見つけることができないのか。事故の前からですよ。政治の責任で進めようと思ったけども、出来なかったんじゃないですか。それを事故の後、これから政治の責任で見つけなさいというのが必要論者の主張ですよ。私はこの方がよっぽど楽観的で無責任だと思いますよ

私はフィンランドのオンカロに行ってきましたよ。世界で唯一、原発から出る核の廃棄物を処分する場所ですよ。オンカロというのはフィンランド語で洞窟とか隠れ家とか、いろいろあるようですけれども、フィンランドというのは岩盤で出来ている国ですよ。道路通ると分かりますね。地下を掘らなくても、トンネルが岩盤ですよ。岩盤をくりぬいて道路をつくっているんです。オンカロに着くまでに首都ヘルシンキから飛行機で５０、６０分乗っていくんですよ、飛行機で。２００㌔以上あるんですから。６０分かけて飛行機に乗って、飛行場から今度は海岸に出て、海岸から船で１０分か２０分。島につく。その島の中に高レベル放射能の最終処分場をつくっている。それをオンカロと今、言っているんです。オンカロといえば核の最終処分場のことになっています。そこに行ってきたんですよ。私は簡単にヘルシンキの近くで見れるのかと思ったら大違いでしたね。認識が甘かったですね。そして、ヘルシンキから２時間ぐらいかけて、そこで防護服、ヘルメット、装備をして、４００㍍地下に下りていくわけです。もう入り口から岩盤です。中に入っていくのにエレベーターじゃないんです。「エレベーターがあるのにどうして乗っていけないのか」と言ったら「あれは物資用のエレベーターで人間は乗れないんだ」と。車で行くんです。人数制限があり、運転手も入れると１０人ちょっとしか乗れないので。「７人までしか乗れない」と言われて視察団は７人までに制限されて、ジグザグにマイクロバスで降りていった。

オンカロだって十全ではない

約４００㍍の地下ですね。４００㍍の地下に縦横２㌔㍍の広場をつくってるわけです。縦横２㌔

㍍。その広場に、円筒形の筒を作って、核のゴミを入れて埋め込むわけです。４００㍍の地下に２㌔四方の広場があって、これ全部埋めるというんだけど、この核のゴミも２基分しか容量がないと言っているんですよ。フィンランドは今４基、原発を持っている。そしてこのオンカロ施設は２基分しか核のゴミを処分できないのだけれども、あと２基分の原発の核のゴミはまだ場所は決まっていないと言っています。住民の反対で。しかも国会でこのオンカロ建設が認められているのは、いかなる国の核の廃棄物も受け入れないという前提でこのオンカロを作っているんだと。地震がない。そういう国ですから、しかも岩盤で。「これでもう決まっているのか」と言ったら、「いやまだ最終審査が残っている」と。「何だ、最終審査って」と聞くと、岩盤で所々水が漏れているところがあるんですよ。「ほら、あそこに水が漏れてるだろう」と。地面です。「ああ、そうか、あれが水か」。水が漏れているか漏れていないかをまだ完全に調べなきゃいけないんだと。１０万年もつかどうか調べないといけない。４００㍍掘れば、大体、水って出てきますよね。ところが全部岩盤ですから、そんなには出ないだろうと。

振り返って日本を考えて下さいよ。４００㍍掘らないうちに水なんてしょっちゅう出てきますよ。中には温泉が出てきますよ。しかも２基分のゴミだけでも２㌔四方の広場ですよ。５４基、もっとも今４基は廃炉にすることが決まっていますから。福島の５号機、６号基も廃炉が決まっているんですから。それでも最終処分場をどれだけつくらないといけないんですか。１０万年後のことで、もう一つ考えなければいけないことがあります。放射能というのは危険で近寄っちゃいけないんだけれども、色がない、臭いがない。近づいてもこれが放射性物質か分からない。

それも１０万年後の人間がこのオンカロに来て、なんだこりゃ、と思って果たして放っておいてくれるかなと。そっとしておいてくれるかなと。人間というのは好奇心が強い。必ず分からないものがあると掘り出そうとする。これを絶対掘り出してはいけないというように、どういう文字を使ったらいいか今、考えているんだと。１０万年後の文字と言ったら。我々は今４００、５００年前の日本語だって文字を読めないですね。考古学者はピラミッドを発掘しても出てくる文字読めないんですよ。２０００年、３０００年前。それを１万年、２万年じゃないですよ、１０万年後に「あ、ここに近づいちゃいけない、掘り出してはいけない」という文字を何語にしようかと言っている。国連が使っている英語その他。フィンランド語。しかし、字は変わりますからね。日本語だって最近、私なんかついていけない若者たちの言葉がありますよ。我々若いころはね、「あの人切れるな」というのは頭良いことだったですが、今「あの人切れるな」というと、ちょっとおかしい人のことです。最近、また驚いたことがあったなあ。この前食事をしていたらね、「やばい」と言うんですよ、食事した人が数人。「何、何だ、何か悪いもの入っているのか」と言ったら、「いや、やばい程うまい」と言うんですよ。我々の世代の人から言うとね、「やばい」と言ったらこれは「まずいぞ、危ないぞ、なんか変なもの入っている」と思いますよ。「うまい」という表現が「やばい」ってなっちゃった。本当にやばい時代だなと思った。言葉を１０万年後に分かるように考えているという。笑い話じゃないですよね。それが本当にできるのかと。事故前にも見つからなかったんですよ、日本は。それを必要論者は「めどがつかなかったのが問題、それも政治の責任だ」と。「政治の責任で処分場を早く選定して建設しなさい」と言っているんでしょ。この方がよほど楽観的で無責任ですよ。繰り返し言うが。そう思いませんか。

郵政民営化解散は一か八か

総理大臣というのはたしかに権力が強いですよ。しかしね、総理にはね、いかに権力が強くてもね、使える権力、使っても実現できない権力、そういう権力があるはずだと思うんです。今、総理が決断すればできる権力、それが原発ゼロの決断ですよ。こんなに恵まれた環境はないですよ、総理大臣として。私が総理大臣在任中、郵政民営化をやりましたが、あの時よりもはるかに環境がいいですよ。総理大臣が権力を行使しようとする場合。私は総理になってね、郵政民営化は必要だと。ある時、外人記者から質問されましたよ。「小泉さん、あんたは郵政民営化が必要だと思って総理になったのでしょうが、日本は民主国家でしょ。国会があるんでしょ。国会の多数派の支持を得ないと民営化の法案を出しても成立しませんね。しかし今、郵政民営化は全野党が反対じゃないですか。自民党与党も反対じゃないですか。どうして民主主義の日本でそんなことが出来るんですか」と質問されたことがありますよ。私は笑って「まあ見ててよ。今に分かるから。出来るんだから見ていてください」と。

しかしね、結果的には国会で賛成多数の結論は出てくれなかったですね。否決されちゃいましたね。当時、郵政民営化は全政党が反対だったんで

すよ。２００１年の３月、森総理が退陣表明する自民党の党大会で時の党執行部は郵政国営堅持という決議をしたんですよ。なぜならば４月に総裁選が行われるだろう。小泉がもし総裁選挙に立候補したら郵政民営化を主張するに違いないと。私の総裁総理就任１カ月ほど前に与党自民党は郵政国営堅持の決議をした。民営化させないと。そして２００５年８月参院で郵政民営化法案は否決された。普通これでおしまいですよ。廃案です。その時、私は前々「郵政民営化法案が否決される場合には小泉内閣不信任と同じだ」と言っていましたから、これは暗に「否決したら解散するぞ」という方針だったんです。しかし反対派の議員は信用しなかったですね。それは無理もないですよ。衆院を解散したって、参院の構成は変わらないんですから。「小泉が衆院を解散して勝利を得たって参院は変わらないんだから、何度でも否決してやる。解散なんて脅しだ。解散なんてできっこない」と言って、自民党員の中で結構反対がありましたので否決されちゃった。ところが、私は０５年８月８日、まあ追い込まれ解散ですね。私は本当に賛成してもらいたかったんですよ。あの８月、暑い夏、これまた解散やって体がもつかなと。確かに勝利を得ても、また参院で否決されるのかなと。しかし、これは国民に聞いてみるしかないと思って、あの８月の解散はまさに乾坤一擲、この文字がぴったりの解散だったんです。やってみなきゃ分からない。一か八か。ところが、国民に聞いてみたら、国民が支持してくれて、９月１１日の投票日、開票日。開けてみたら、郵政民営化の公認候補が多数派を占めて勝利を収めた。そうしたら「何度でも否決してやる」と言っていた参院の議員はクルッと賛成に回っちゃったじゃないですか。

総理は権力を望ましい方向に使える

それに比べれば今どういう状況ですか、原発。野党は全部原発ゼロに賛成ですよ。原発ゼロ反対は自民党だけじゃないですか。しかし、本音を探れば、自民党の議員で賛否どうかと言えば、私は半々だと思っていますね。ゼロ賛成と必要が半々くらいじゃないか。しかし、ここでもし安倍総理が「原発ゼロにする、自然を資源にする国家をつくろう」と方針を決めれば、反対派はね、もう反対できませんよ。ここで必要論を唱えているマスコミの人も意見が変わるだろう。総理がゼロに方針決めれば。自民党の中で反対する者がいても、あくまで必要だ、原発ゼロだめだ、というのはごく限られたものでしょう。非常に今、安倍総理としていかに国民から与えられた権力を望ましい、あるべき姿に向かって使うか。こんな運のいい総理いないですよ。使おうと思えば使えるんですよ。総理が決断すれば、今の原発ゼロ反対論者も黙っちゃいますよ。自民党の中でも、今言った人たち、顔が浮かびますけども。安倍総理がゼロにしたら楯突く議員はほんの一握りの人です。できるんですよ。しかも国家の目標として、ほとんどの国民が協力できる体制ができるんですよ。国会、もし自民党がゼロにするという方針を決めれば、野党は今全部賛成なんですから、全政党が賛成ですよ。提案だって野党からいろいろ出てきますよ。識者からいろんな知恵でてきますよ。これに向かって進むことができるんですよ。このチャンスを活かす政治は大事だと思いますよ。

これとは逆に、どうしても政治の責任で最終処分場をつくるんだと。住民の反対を押し切れますか。押し切ろうと思って権力を使うよりは、久しぶりに珍しく、国民が、国民の多数が総理の真意に協力しようという体制ができる。こういう状況はめったにないですよ。しかも壮大な事業じゃないですか。夢のある事業じゃないですか。自然を資源にする、そういう事業。それに総理の権力をふるうことができる。こんな運のいい総理いないと思いますよ。私はそういうことから、今は政治の出番だなと、総理はどのように権力を行使すべきか。国民はね、こういう方向に、望ましい方向に権力を使ってくださいと期待している、お膳立てをしていてくれるんですよ。これは結局、総理の判断力、洞察力の問題だと思いますけれども、是非ともそういう方向に舵を切ってもらいたいなと思います。

今日はこの原発問題ばっかり議論するわけにはいかないですけれどもね、私はつい最近、河野太郎代議士からある本を送られたんです。これを読んでおくと参考になりますよと。何という本かと思ったら、アメリカの物理学者、エモリー・ロビンス博士の著書『新しい火の創造』。ロビンス博士はロッキーマウンテン研究所の会長をされています。日本の旭硝子財団からブループラネット賞も授賞されている。２００９年にタイム誌が選ぶ「世界でも最も影響力がある１００人」に選ばれている人です。個人的な著書じゃないですよ。ロッキーマウンテン研究所の会長をされているんですから。その研究所が出版したんです。『新しい火の創造』を読んでみたところ、この専門家集団が何と、アメリカで脱原発が必要だと解いているんです。しかも、もっと進んでいますよ。２０５０年には脱原発、脱石油、脱石炭、脱天然ガ

ス、これも実現できる、という本ですよ。うかうかしていると日本の先を超してアメリカが脱原発と言い出すかもしれない。これは非常に参考になる本だったと思いますね。是非とも安倍総理は、この大きな権力を久しぶりに多くの国民が協力できる壮大な事業に使っていただきたい。心から期待しております。

靖国参拝反対は世界中で中韓首脳だけ

今日はまだ時間がありますので、総理大臣を経験しましたので、ひとつ中国問題に関して、面白いところがあったのでご披露します。２００４年にチリでＡＰＥＣの首脳会議が開かれたんです。毎年、環太平洋経済連携協力会議ですが、略してＡＰＥＣ、太平洋に面した２１カ国の首脳が集まる会議です。毎年私は、その会議が始まる前、アメリカの大統領、ロシアの大統領、中国の主席と会議の合間を縫って２者会談、それから後の首脳との２者会談の予定を決めていたのです。２００４年１１月チリで行われた首脳会談、アメリカ大統領、ロシア大統領との首脳会談は早く決まったんです。日本出発前に。そろそろ日本を出発する。出発する前に中国との首脳会談を決めておこうと思ったところが、なかなか返事がこないものですから、外務省の担当者に催促するようにと、行く前に２者会談を決めて行こうと。そうしないと今、いろいろ首脳会談の申し込みがあるから、時間もなくなる、ということで指示を出した。ところが、外務省の担当者は「困ったことが起きた」と言って帰ってきた。「何だ」と言ったら中国側がね、１１月でしたから「来年、小泉総理が靖国参拝しなければ首脳会談を行う」という返事が来た。「どういう返事をしましょうか」と言うんですよ。私はこう返事しろと言ったんです。「来年、小泉総理は必ず靖国神社に参拝します。それで首脳会談をお断りするなら仕方ない。しかし、小泉は日中友好論者ですから」と。そういう返事をしろと言った。これでもうチリでの日中首脳会談は出来ないなと思ったんです。ところがしばらくすると返事がきましたね。早かったですね。「驚きました。驚きました」と言うので「何に驚いたのか」と聞いたら「ＯＫしました。首脳会談ＯＫしました。ただし、必ず首脳会談の前には記者が小泉総理に聞くだろう。来年、靖国神社に参拝するかどうか必ず聞くはずだ。会談する前も、会談した後も『する』とは言わないでくれ」と言うから「あっ、それはいい」と。だから、あれから記者の諸君に「来年、靖国に参拝するんですか」と聞かれた場合、私は「適切に判断する」、「適切に判断する」と言っていたでしょ。

今ね、日中問題、首脳会談できないでいるんですけれどもね、中国も実は本心では困っていると思いますよ。首脳会談したくても、内政の事情でなかなかできにくい事情があるんでしょうね。私が靖国神社に参拝するから、中国問題、首脳会談ができないんだ、と日本の一部から大変非難されました。マスメディアの方々から。私の辞めたあと、総理大臣一人も靖国神社参拝していないじゃないですか。それで日中問題うまくいっているんですか、首脳会談できているんですか。そうじゃないこと分かったでしょ。尖閣問題なんて、日本の当たり前の主張をしているだけですよ。

どこの国だってね、戦没者に対して哀悼の念を総理大臣がその国の施設に参拝する、哀悼の意を表する、そんなことを批判する首脳は中国、韓国以外ありませんよ。ある一部の人がね、小泉は中国、韓国が言っても聞かないけれども、アメリカのブッシュ大統領が「靖国を参拝するな」と言えば聞くんだろうという意見をどっかで出していた。それを見たから、私はブッシュ大統領との会談で、中国問題が話題になった時、その話をしたんです。「日本の一部の人が小泉は中国の言うことは聞かないけど、アメリカの言うことは聞くだろう。ブッシュ大統領が『靖国参拝するな』と言ったらしないと言っている」と言ったら、ブッシュ大統領は笑って「俺はそんなことは言わないよ」って笑っていましたよ。

外国の首脳で、靖国参拝を批判する首脳は中国、韓国以外はいませんよ。どの首脳も。日本の憲法第１９条に、思想及び良心の自由はこれを侵してはならない、と明記されているんです。批判する方がおかしいと今でも思っていますよ。これから、中国への対応は、今の安倍総理の対応でいいですよ。首脳会談できなければ、他のレベルでの政治家同士の対話、行政間、役所同士の交流、政治、経済、文化、スポーツ、さまざまな交流を日本は積極的に求めている、常にドアは開かれている、という対応でいいんですよ。そんなにね、「してくれ」、「してくれ」なんて頼まなくてもいいんですよ。お互い、いずれ、首脳会談が行われないのは良くないな、と時間がくれば分かりますよ。いずれ時が来れば、中国だって、「あの時、日本の総理の靖国参拝を批判したのは何と大人げない、まずい対応をしたのか」と。そして恥ずかしい思いする時がいずれは来ますよ。今はそういう状況ではないと思うから仕方ないんですけど。日本は中国が重要なのはよく分かっているわけで

すから。中国と友好関係を保つことがいかに重要かということをみんな分かっているのですから、ここまで中国側とさまざまな分野で協力してきたんですよ。これからも、その方針は堅持していかなければならない。

日米関係が良ければ他国との関係も良くなる

一時期、日米中正三角関係論というのが出ていましたよ。自民党の一部にも民主党にも。日米関係と日中関係が同等だ、と。これは、私はおかしいことだと思っていましたよ。まだ民主党政権になる前でしたけどね。ところが民主党政権になっても、ようやく日米関係と日中関係が正三角形、同じだと思わなくなったこと、これは一つの進歩だと思いますけど。今、日本一国で安全は確保できない。同盟国としてアメリカに変わる国はありますか。ないですよ。アメリカの影響力はかつてよりは落ちたとはいえども、世界で政治的にも経済的にも軍事的にも、日本の同盟国としてアメリカに替えてもいいような国は見当たらない。

そういうことを考えると、私が総理の時「日米関係が良ければ良いほど、中国はじめ各国と良い関係築けるんだ」と言ったら、一部から「アメリカと関係が良ければ、あとはどうでもいいのだ、と小泉が言っている」と誤解されましたよ。歪曲されました。まあ、誤解というよりか、知っていながら、そういうふうに批判のために言ったんでしょうね。ようやく分かってきた。民主政権になって。日米関係が悪くなって、その分、他の国で補おうという考えを持たない方がいい。日米関係が良ければ良いほど他の国と良好関係を保つことができる。これは、これからもそうだと思いますよ。アメリカが日本を守ってくれるんだろうか、という言う人がいるけれども、その前に同盟国として日本はアメリカにとっても信用できる国なのかということを考えた方がいい。日本はアメリカを信用するのか、それは考えてもいいですよ。同時に、同盟国の相手として日本というのはアメリカにとっても同盟国として信頼に足る、そういう国なのかということを常に考えながら、日米関係を友好に保っていかなければならんと、総理の時代も総理を退任してからも、その考えは変わりませんね。

メガフロートを真剣に考えよう

私は横須賀出身なので、まだ私が１年生議員の頃でしたかね、４０年くらい前です。横須賀には米軍基地があります。そこでメガフロートという構想が持ち上がって、積極的にメガフロートを作るべきだということを聞いた時期があったんです。メガフロートというのは海上に空港みたいな、基地みたいな、航空母艦ではないですけれども、いくつか重ね合わせて飛行機が離着陸出来る。そういうメガフロートですよ。しかし、それは当時はね、４０年くらい前ですから、海上といっても杭を、埋め立てみたいに全部埋めなくてもいいんだけれども、杭を海底に埋めなければいかん。費用もかかるということで、うやむやになっちゃったんです。

私は最近、沖縄基地の負担軽減、あるいは日本の安全保障、さらに海洋国家日本として、このメガフロートというものを真剣に政府が検討した方がいいと思いますね。しかも、航空母艦だったら非常に金がかかります。航空母艦を見るとあのわずかな距離で米軍は離着陸、もう神業ですよね。離陸も着陸も訓練しているわけですよ。ですから、航空母艦をつくろうと思えば、非常に莫大な費用がかかるでしょうけど、移動基地ですね。航空母艦のような攻撃用じゃない、海上移動基地のメガフロートを真剣に考える時期がきているなぁと思います。

沖縄の基地の負担を軽減していかなければならない。なかなか日本本土でもね、陸地にそういう基地、離着陸訓練などを新たに作るなどというのは非常に困難を伴うでしょう。日本の技術だったら、航空母艦を作るつもりで、海上に移動できるメガフロート基地を作ることができると思うんですね。現に航空母艦を初めてつくったのは１９２０年のイギリスですよ。その２年後、１９２２年に日本が航空母艦を作っているんですよ。今から９０年前。今の技術から言えば、移動式で海上メガフロート基地を作れば、これは、いざ災害があった時に自衛隊が被災地に救援に赴く場合でも役に立つ。新しい領土ができたようなもんですよ。沖縄基地負担軽減にもなりうる。日本は領土が広がったようなものですよ。移動できるから台風もよけていくことも出来るんですよ。このメガフロートをやれば、日本は新たな展望が開けるんじゃないでしょうかね。これは私はね今後、日本の安全を考えるためにも、基地問題を考えるためにも有効な手段として、メガフロート移動基地を考える時期にきているんじゃないか。日本の安全を確保する面からも。これできれば世界も注目しますよ。海洋国家日本が海を利用してこういう新しいものを作りはじめたか。さらに原発問題も、将来原発ゼロ。またアメリカのロビンス博士が考えているように脱石油、脱石炭まで考えちゃうと

いうような、自然を資源にする夢のある事業に乗り出したかと。そうすれば日本は世界からモデルとなる模範となるような国家として、また発展できる時期が来るのではないかと。

ピンチは最大のチャンスだ

何事もピンチはチャンスです。過去の歴史を見ると、本当に凄まじいピンチを日本は乗り越えてきましたよ。関東大震災だって、まだ９０年前ですよ。東京中心に１０万５０００人が亡くなったんです。命を落としたんです、大震災で。その後、立ち直るまもなく昭和恐慌ですよ。１９２９年。そして第二次世界大戦に突入しちゃった。東京は焼け野原、広島と長崎に原爆が落とされた。何と３００万人以上の国民が命を落としたんです。３００万人以上ですよ。それでもくじけなかった。最大の敵アメリカを最大の味方にしてしまって、今日の平和国家、世界で一番長生きできる国家をつくりあげたんです。あの敗戦後、夢のような状況ですよ、今考えてみれば。今再びこの大震災のピンチ、どうやってチャンスに変えるか。あの昭和４８年、１９７３年の石油ショック、あのピンチがあったからこそ、今日本は環境先進国になっているわけですよ。今度の大震災、地震、津波という震災のピンチを夢のある事業に、国民の望ましい方向に持って行く権力を今、安倍総理は持っているんです。これを望ましい方向に使っていただきたい。決断すれば、今の自民党議員もほとんど従いますよ。そうすると、全政党が総理の方向に協力できる体制ができる。しかも望ましい方向ですよ。夢のある方向ですよ。それをぜひ理解していただきたいなと思っております。質問の時間を残せという命令ですので、この程度で終わらせたいと思います。

≪質疑応答≫

司会　相当に質問の時間が残っちゃったんですけど、私から聞きます。今「原発ゼロ」を言うことの国民にとって夢のある方向性、そして総理大臣しかそれをなしえない。総理大臣がすれば、そういう方向に、かつての郵政改革とは比べものにならない形での大きな求心力を持って前進するだろうという非常に力強いお話だったのですが、実際問題として、小泉さんがこれだけいろいろなところでお話されて、当然、首相官邸の安倍さんには耳に入っているはずで、ご自身は直接話をされていないということだったのですが、どうも今のところ、これから先もですね、安倍さんがそういう方向に踏み切るのかどうか。安倍昭恵夫人ならば踏み切るかもしれません。ただご夫人が決断しても物事は動かないと思うんですね。そうなってくると、安倍さんの後の別の方が決断しないとそういう流れにはならないのか、とも思ったりするし、その間に野党の方々がいろいろ動いて、そういう流れを作られたりするのかな、とも思ったりするのですが、その非常に重要な流れをどうやって作り、結果的に実現していけばいいのか。小泉さんはそういう中でこれからもどういう役割を果たしていかれるのか、そういうことについてお聞きしたいと思います。

自民党内で原発の意見集約を

小泉　今日の新聞ですけど、石破幹事長の談話が載っていました。それは「小泉さんの方向と違わない」という発言なのですよ。随分違ってきたなと思うんです。「方向性は同じだ」と。たしかにね、自民党の参議院選挙の公約を見ると、再生可能エネルギーに最大限努力していく、原発依存度をできるだけ減らしていくと。だから自民党はこれからね、石破幹事長が音頭を取ってね、原発を含めてこれからのエネルギー政策を議論しようと党内ですれば、賛否両論出ますよ。そして賛否両論、これを総理にあげていけばいいんですよ。必要論者とゼロ論者、両論併記。「総理、どちらに判断しますか」と。安倍さんが判断しやすいような環境を幹事長が作っていけばいい。そんな難しいことじゃない。

自民党の議員の中にも本心はゼロにしたほうが望ましいな、と考えている議員はかなりいますから。今話があったように総理の力は絶大ですから、総理が「ゼロにしよう」と言えば、そんな反対出ませんね。そういう環境を作っていくことによって、政治的にはね、安倍総理の在任中にこの方向を出した方がいいんじゃないかと思っています。

司会　小泉さんは政権５年半の中で安倍さんを要職にずっと置かれて、ある意味では育ててこられて、安倍さんは今に至るわけですけれども、安倍さんを最もよく知る政治家の一人として、今のような舵の切り替えは安倍政権時代にあり得ると思ってよろしいのでしょうか。

小泉　いや、ありうる方向に行ってもらいたいと期待しているんですよ。それは、総理大臣はどういう考えを持っているか、その胸中を推し量る

のは難しいでしょうし。私は望ましい方向に総理の権力を使ってもらいたいな、と。その望ましい方向に権力を使える状況が、こんな恵まれた時期はないと思っている。このピンチをチャンスに変える権力を総理大臣は持っているんですよ。もったいない、と。この環境を生かさないと。分かってほしいなと思っているんです。

司会　せっかく日中の話もしていただいたので、靖国参拝の話は小泉さん、一貫してそうおっしゃっているから「なるほど」と思いました。今の安倍さんの姿勢もそれでよろしいと。ただ尖閣問題は今、現場ではある意味では一触即発的な危険性も秘めた展開をしているところなのですが、もし小泉さんが政権担当者であれば、この局面をどう打開したでしょうか。

小泉　それは、日本の考えを尖閣に対して変える必要はありませんから。今の総理みたいに情報を持っているわけではありませんけれども、毅然として今までの主張を中国側に対してもはっきりと述べることが大事だと思いますよ。それで首脳会談を中国が拒否するのであれば、そのほかの交流はできるだけ多く進めていくという方向でいいと思います。

質問　私は推進論者でも何でもなく、中立の立場でお聞きしたいのですが、先程「郵政民営化の時よりうんと恵まれている」というようなお話がありました。それから郵政民営化には小泉総理がどれだけ命を懸けたか、ということも分かっているつもりですが、今回の脱原発は小泉さんにとって郵政民営化と同等ぐらい命を懸ける本気のテーマなのでしょうか。だとすれば、安倍政権に舵を切らせるために具体的にどのようなことをこれからやっていこうとお考えでしょうか。お答えください。

原発ゼロ、一人一人の考えが大事

小泉　原発ゼロにして、自然を資源にしてエネルギー政策を転換しようというのは、郵政民営化どころの比じゃないですよ。壮大な夢のある大きな事業ですよ。どういうふうに実現していけばいいかというのは今、党内で議論させれば、そんなに推進論者が多いとは限らない。ゼロ論者の賛同者もいるのが分かってくると思いますよ。そして、どっちの両論でも、総理が決めたことに従うんですよ。今、原発ゼロの声が自民党内でなかなか上がってこないのは、総理が「必要だ」と言っているからですよ。それが「ゼロにする」と言えば、全く変わっちゃいますよ。最終的には国民ですね。世論というのは軽視できないですね。世論に抗してやらなきゃならないこともある。しかし大きな底流となっている根強い世論というのをどう読むかというのも政治家として大事だと思います。

国会だけで決めて、あの郵政民営化を廃案にした。しかし選挙で国民が支持すると、国会議員も変わっちゃうんですよ。最終的に総理の権力というのは国民から与えているんですから。その国民の声というものはね、総理も聞かざるを得ない時期が来ると思います。諦めちゃいけないんですよ。私は今、いろいろな人から「新党を考えたらどうか」とか、「原発ゼロ論を展開している人も他にいるんだから、よく連携したらどうか」ということを言われるんですが「それは、それぞれの立場でやった方がいいんじゃないか」と。そして、主張を展開する時にはね、誰が賛成しているか、誰が反対しているからというよりも、やっぱりやむにやまれぬ気持ちがないと、公に自分の主張を展開できないですよ。「１人でもやるという気持ちでやらないとだめだよ」と連携を呼びかけている人には言っているんです。

政党にしても個人にしても、「あの人が反対だから」と、そう考えない。ほか全部と自分の意見は違っても、自分は本当にこう思うんだということを展開していかないと、なかなか世の中っていうのは動かないよと。ですから、国民が本当に原発ゼロの社会を望むのだったら、国民のみなさんもそういう気持ちを持って運動していくならば、必ず政権に届くはずですよ。自由民主党っていうのはね、国民世論にかなり敏感な政党ですよ。だから政権を長く担当したんですよ。一部の支持があれば当選できるという政党じゃないんですよ。国民の過半数の支持がないと議員になれない、過半数の支持を得ないと政権を担当できないんだということをよく分かっている政党が自民党だと思うんです。だから国民の声が、本当に、原発ゼロが望ましいなというのがだんだんだんだん政権に届いていけば、総理だって気付いて来ると思うんですよ。長いようで、それが民主主義として必要じゃないでしょうか。

質問　原発推進の立場ではありますが、質問は原発ゼロを方針として今出すというのは分かるんですが、ゼロにする時期はどうお考えなのでしょうか。時期については即時ゼロを言う人もいれば、３０年後という人もいて、野党も考え方は同

じじゃないんですね。これについては小泉さん、どうお考えになっているのでしょうか。

準備のためにも原発即時ゼロ方針を

小泉　私は即ゼロの方がいいと思いますね。その方が企業も国民もさまざまな専門家も準備ができる。安全なものを再稼働させると言っていますがね、再稼働するにしてもそんなに多く再稼働できないでしょう。そうしたら代替エネルギーでできると思いますね。しかも再稼働すればまた核のゴミが増えていくわけですよ。再稼働させると言ったって、最終処分場は見つからないんでしょ。だったらすぐゼロにした方がいいと思いますよ。そして原発に代わる代替エネルギーに対して、原発に当てた費用を回した方がいい。日本の企業なら、そういう原発に代わるエネルギー源は発明し、開発していきますよ。だから早いほうがいいと思いますよ。もう、今ゼロなんですから。これをずっと再稼働も中止すると。早くゼロにする。何年かかって廃炉を実現するか。これも難しいですから。そういう点は、将来ゼロにするという方向でやった方が、中間貯蔵施設を作るにしても理解を得やすい。だから私は早いほうがいいと思います。今もゼロですから。

司会　それはもちろん核燃サイクルも含めて？

核燃料サイクルを含めて廃止

小泉　もちろん核燃サイクルも含めてです。その手当をするのも、早いほうがいいでしょう。進んで行ってやめろと言うよりも、どうせ将来やめるんだったら、今やめたほうがいいでしょう。

質問　小泉さんが普天間飛行場の移転先の話と受け止めたのですが、メガフロートのお話をなさいました。沖縄では鳩山政権の時に最低でも県外という発言をした後から政治潮流が変わりまして、現時点では県議会の与野党全会一致で県内移設には反対という表明をしております。今のお話でメガフロートが沖縄の負担軽減にも役立つというお話でしたが、小泉さんが総理の時代に今の辺野古の沿岸なり浅瀬なりという話があった際に、今の現状の案が大体決まりました。今日のお話を聞いていると、全く違ってきたなぁ、と私は思ったのですけれども。沖縄の負担軽減の中で、今の名護市の辺野古への移設案ということについてどう思われているのか、それから今のメガフロートのお話をもう少し詳しく聞かせていただければ、大変有り難いです。

小泉　名護市の基地の問題。あれは埋め立てがもっと沖合に出せというのと、できるだけ埋め立てを少なくしようということで、私は埋め立てが少ないほうがいいということであそこに決めて、今もう、政府として何とか理解を得るために協議中ですから、これはできれば進めてもらったほうがいいなと。メガフロートは将来の問題です。十分技術的に、メガフロート、航空母艦を作ろうと思えばメガフロート移動基地というのはできると思いますよ。これは将来、真剣に防衛省だけでなく様々に、そういうメガフロートをやってきた企業もありますから、そういう専門家を集めて、将来、どういうメガフロート移動基地みたいなものができるかということを、これから検討した方がいいと思います。

司会　普天間に替わる政策ではないということですね。

小泉　そりゃそうです。今言ったように、将来の、国全体の問題として、海洋も有効に活用しようと。基地というもの、そういうもの、できるだけ国民の理解を得やすいものを作るということを考えた方がいいということであります。

（文責・編集部）